

『和泉式部日記』叙述の方法

久保木 寿子

一、問題の所在

『和泉式部日記』（以下『日記』）研究の一半は、周知の通り、主たる伝本の内、三条西家本・応永本が「和泉式部日記」の標題を持つのに対し、寛元本が「和泉式部物語」として伝わることもあつて、「物語か、日記か」という問いに象徴されるように、その特異な視点の有り様を巡って展開してきたと言つても過言ではない。

①女の体験外の事象を記すことがある

②時に「女」という三人称呼称を用いる

主として右の二点に集約される当『日記』の叙述の特徴は、一人称視点からその見聞の範囲で自記的に記されることを前提とする旧来の仮名日記の概念に収まらず、整合的な説明が難しいことから、しばしば「視点の混乱」として扱われてきた。

このことから今井卓爾¹⁾による『日記』他作説（『平安朝日記の研究』一九三五）が出され、その批判を通じて『日記』の読みが深化する展開の中で、鈴木一雄²⁾は、この特異な視点を「作者の心理的秩序―意識の流れにささえられた自在な主体転換が

もたらした」とものと見て、「超越的視点」と名付けた（『全講和泉式部日記』一九六四 改訂版一九九四）。自記としての一貫した読みへの志向が前提にあつたと思しい。これは物語の「全知視点」とは異質な、当『日記』の視点の限定的な特性を衝くものではあつた。

一方、山口仲美³⁾（『平安朝の言葉と文体』一九九八）は、描かれる範囲が限定的なだけで、一貫して語り手の全知視点からする客観表現がなされており、基本的に物語的視点と何ら変わりはないとした。これに対して、例えば土方洋一⁴⁾『和泉式部日記』の表現構造（二〇〇五・一）は、『日記』の地の文が語りの文体ではないこと、語り手主体・語り手の場の設定が十分に形成されておらず、語り手の場と物語の世界との距離感が希薄であること、さらに冒頭から「四月十余日」という暦日的時間表現が見られることを挙げ、「物語」とは異なる独自の一回的な文体であることを確認している。

このような中で、秋澤互⁵⁾（『和泉式部日記』の視線―超越的視点の再吟味を通して）二〇〇四）は、鈴木の言う「超越的視点」が「作者の実在の目によるもの」ではないとして、「実体的な分析には馴染まない」「機能としての視線」の存在を、「叙述の視点」と名付け明確化しようとした。そして、「この作品の『視点』には、位相差に応じた段階的な把握が不可欠」としている。

明記されていないが秋澤の言う「位相差」を、「主題の展開」

に伴う幾つかの場面構成が示す叙述についての言と捉えて良いであろうか。整合しない視点の問題を、一括して「作者」の「心理」に委ねるのではなく、『日記』の主題に即した各小場面と叙述の相関から、個別に見ていく方法は有効なものと思われる。

その際の「主題」の捉え方について確認しておきたい。従来、宮と女の「共感」形成の帰結として「南院入り」を位置づけるという、恋愛の進展に則した単線的・一元的な主題把握が為されてきたのだが、先に稿者は、『日記』内に当初から敷設されている「南院」と「女邸」という二つの異質な「時空」に注目し、主題の再検討を試みた。即ち、『日記』は初発の段階から、階層秩序の下、政治的現実的論理に則って機能する「南院」という時空を敷設しており、その現実的論理が、皇位継承権者である宮の「忍びの恋」の不都合を解消するべく、女を「召す」という解決策即ち「南院入り」という主題を浮上させる。これを容れた宮は、「女」が「召す」に足るか否かを見極めようと迷い、女は「召し」に応じて異世界たる「南院」に参入するべきか否かの岐路に立たされる。「南院入り」を二人がそれぞれに納得し肯うためにこそ、「共感の形成」というもう一つの主題が浮上する。それは「故宮」の追懷に始まる「女邸」を主たる舞台として果たされて行き、やがて「南院入り」として収束すると捉えるのである。

このような二元的主題のもと、「南院」「女邸」という二つの異質な時空が機能し、「南院入り」を巡って二人の男女のそれ

ぞれ別個な思惑が交錯する。とすれば、『日記』の叙述には、その双方を見通す視点が要請されることになる。この『日記』の限定的な視点の移動、あるいは「視点の錯綜」は、そのためにこそ招来されたものではなかったか。この『日記』の叙述の視点は、このような二つの主題に規定された、優れて一回的なものなのではなからうか。

本稿では、右のような見通しの下で、作品内に「叙述主体」を措定し、主題展開を支える小場面に即して叙述の有り様を具体的に検討したい。「叙述主体」とは、叙述機能を便宜、実体的に措定したものである。宮と女の交錯する眼差しの間隙を埋めるべく、「叙述主体」が機能するという想定である（「叙述」という語が実体的に過ぎるとすれば、むしろ「認識」主体という方が適切であろうか）。

本文、段数・見出しは、近藤みゆき訳注『和泉式部日記』（三条西家本を底本とする―角川ソフィア文庫）による。

二、小場面と叙述

二元的な空間構造に加えて、三期に渡る時間構造を想定することにより、『日記』を七つの小場面として押さえたい。ほぼ月次に進行する『日記』の中で次に示す三つの日付は、「南院入り」の進展に関わる重要事の出来を示すもので、曆日的意味合いが強い。

(1) : 明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば… (一段)

(2) 十月十日ほどにおはしたり。奥は暗くておそろしければ…

(一八段)

(3) : 率て去なん」とおぼして、十二月十八日、月いとよきほどなるに、おはしましたり。例の…とのたまはすれば…と思ひて…とのたまへば…と思ひて、人ひとり率て行く。(三段)

『日記』冒頭部、(1)「四月十余日」は、忍びの恋の始発を夏の到来という時節に寄せて漠然と示すための記述ではない。「小舎人童」という「南院」からの使者が、歳時記的な時間の流れの中にある「女邸」に登場したことにより、本来「南院」の時空を象るはずの暦日的時間と共に、南院の論理が密かに「女邸」に浸透し始めたことを意味する、そのような表記であった。「南院」の政治的・現実的論理は、宮の「忍びの恋」を容認しない。「召してこそ使はせ給はめ」という乳母の諫言に象徴されるように、それは「女」を召すことによつて、かろうじてへ正当化されるしかなかった。「女邸」は、これ以降、歳時に適う贈答歌のやり取りを通じて、「南院入り」の前提となる「共感形成」のための場として機能していくことになる。

「共感形成」が極まったのが、(2)「十月十日ほど」の「手枕の袖」の場面である。重要なのは、その直後に宮の口から初めて女の「南院入り」が切り出されることである。「十月十日

ほど」という日時は、この画期的出来事を示すためにこそ記された。これまで宮は、乳母の諫言に示されたような女への世評、疑念を払拭し切れずにいたのである。以降、宮から提示された「南院入り」を巡る「女」の側の思案の時間が描かれていく。逡巡しつつも、やがて女はそれを受け容れ「南院入り」を決意していく。これを第二期とする。

実際に「南院入り」が果たされたのが、(3)「十二月十八日」である。その結果、決定的になった宮と宮妃の修復不能な関係が明かされていくのが、第三期である。

「女邸」に流れる歳時記的时间を分断するかのようには、このように「南院入り」の主題に即して三つの暦日的時間が組み込まれ、期を画しながら『日記』は進行する。この暦日的時間によつて区切られる三つの主題的画期を、宮と女の心理の推移に注目しながら、さらに以下のように七つの小場面(i)～(vii)に整理し、順次へ叙述の有り様を見ていくことにする。

第一期 (i) 一段「夢よりも儂き世の中」～(iii) 一七段「代作の依頼」

第二期 (iv) 一八段「手枕の袖」～(vi) 三二段「冬の折々」
第三期 (vii) 三三段「宮邸入り」～三五段「北の方の退去」

〈第二期〉

(i) 一段「夢よりも儂き世の中」～八段「窓打つ雨」

この期の場面設定の特徴は、何よりも先ず「女邸」と「南院」

の両場面が頻繁に切り替わることである。それに伴い、叙述の視点も一人称叙述に収まらない様相を見せることになる。第一期の中でも、固有の官職名で呼ばれる人物が多数登場し、「南院」の時空を性格付けているのが、この（i）部分である。

冒頭部は「女邸」を舞台に始まった。宮の使者「小舎人童」を迎える主体（体験主体）は、「夢よりも儚き世の中を歎きわびつつ明かし暮ら」しつつ故宮の追懐の中にある。一方、登場した「童」は二つの「場」を見聞しうる媒介的位置にある。この童を通じて「南院」の「宮」の存在が、先ずは実体ではなくその「影」としてへ女への視界に表れた。へ女は、視界の外にある南院の「宮」を確認するべく童に訊ねる。「その宮はあてにけしうおはしますなるは」と。こうして、『日記』の基調がへ女を視点人物とする一人称的叙述にあることが、冒頭部で強く印象づけられる。へ叙述主体は機能する余地もない。

にもかかわらず、周知の通り、童の帰参と共に「場」が南院に移動すると、へ女の視野に入るはずもない「南院」での場面が、会話を交えて具体的かつ第三者的に叙述される。

①まだ端におはしましたるに、この童、かくれの方に気色ばみけるけはひを御覧じつけて、「いかに」と問はせ給ふに
 …「かかること、ゆめ人に言ふな。すぎがましきやうなり」とて、入らせ給ひぬ。（二段）

②思ひかけぬほどに忍びでと思して、昼より御心まうけして…とのたまはすれば（三段）

③ご覧じて、「げにいとほしうも」とおぼせど…とおぼしつむも、ねんごろにはおぼされぬなめりかし（四段）

④つごもりの目、女、（歌略）と聞こえさせたれど、人々あまたさぶらひけるほどにて、え御覧ぜさせず。…（五段）

⑤今宵もおはしまさまほしけれど、かかる御歩きを人々も制し…聞こしめさんともかるがろしう、おぼしつむほどにいとほるかなり。（六段）

右の諸例の大半は、へ女との交信に関わる南院での場面で、「人々」を憚り女との交渉を制御するべく「おぼしつむ」宮の有り様を、第三者的に記す。「宮」への敬語や宮の心内の付度が端的に示すように、「南院」を場としていても、宮がへ叙述主体に重なることはない。当然ながら「女邸」にあるへ女は、南院での場面にへ体験主体として参入し得ず、へ女を視点人物とする一人称的叙述は成り立たず、へ叙述主体とへ体験主体（女）は分離する。③「おぼされぬなめりかし」の部分はへ叙述主体への介入を示す好例であろう。

今少し、「南院」での叙述を見ることにしよう。

⑥…ほどに、侍従の乳母のぼりて、「出でさせ給ふは、いづちぞ。このこと人々申すなるは。なにのやうごとなき際にあらす。使はせ給はんとおぼしめさん限りは、召してこそ使はせ給はぬ。かるがろしき御歩きは、いと見苦しきことなり。そがなかにも、人々あまた来かよふ所なり。便なきことも出でまうできなん。すべてよくもあらぬことは、

右近の尉なにがしがしはじむることなり。故宮をもこれこそ率て歩きたてまつりしか。…世の中は今日あすとも知らず変はりぬべかめるを、殿のおぼしおきつることもあるを…かかる御歩きなくてこそおはしまさめ」と聞こえたまへば…(八段)

⑦ よびてやおきたらましとおぼせど「さてもましてきにくくぞあらん」とおぼし乱るるほどに、おぼつかなくなりぬ。

(八段)

⑥の乳母の諫言は、皇位継承権者としての宮の社会的な位置をリアルに示すと共に、「世評」の宜しくない不都合な女を「召してこそ使はせ給はめ」と、極めて[△]妥当な解決策を提示するもの。これを受け、⑦では宮も「召す」ことを意識し出す。が、問題は、宮が女を「召す」決断は、女への全幅の信頼なしにはありえないことであつた。通常の「召人」観によらない独自の関係性が紡がれる必要があつたのである。「南院入り」の前提として、先ず、女の身持ちを巡る疑念が払拭されなければならなかつた。「忍びの恋」は、このように、女に対する宮の懷疑・不審を孕んだものとして展開していく。

「南院入り」の前提として浮上した、女への「疑念の払拭」という宮個人の課題は、読者には開示されるものの、[△]女[△]には説明されないまま進行せざるを得ない。このような設定からしても、女を全面的に一人称の叙述主体とすることはそもそも困難であり、[△]体験主体(女)[△]と[△]叙述主体[△]は分離せざるを得な

かつたものと思われる。

(ii) 九段「月夜の人なき廊」→一四段「寢覚めの萩風」

九段以降は、女への良からぬ「世評」を意識した宮が、疑念を持ちながら女との関係を探る過程と捉えられよう。「場」は「女郎」が主となるが、この「女郎」はしばしば宮の疑念を増幅させる空間として機能する。この女の生活空間は、当然ながら、宮との邂逅以前から続く関係性の中にある。女を誘い出しての他行(九段)は、「女郎」に対する宮の不安の端的な表れ。「たれにしのびつるぞ」(一二段)、「人数におぼさぬなめり」(一四段)と、疑念や皮肉を直に口にもする。「世評」は打ち消し難いもののようにも見えた。それを誤解だとする女側の事情をも視野に入れながら、叙述は第三者的に為される。

宮の女への信頼は揺らぎつつも、途切れることはない。平田喜信^⑧が指摘するように、女に対する宮の評語が、「人の言ふほどよりも子めきて、あはれにおぼさる」(一二段)、「宮も、言ふかひなからず、つれづれのなぐさめにとはおぼすに…」(一段)、「…とあるを御覧しても、なほえ思ひはなつまじうおぼす」(二三段)など、しばしば「二重の否定による肯定」の形を取り、そこに「賛辞への逡巡、韜晦」が読み取れるとされるのも、「作者自記ゆえの間接的表現」(平田)というより、宮が否定的な「世評」に照らして女を見、内心の疑念を打ち消そうとする結果に他ならず、主題性に関わる問題と考えられる。

〈叙述主体〉は宮の心理に即して、それを読者に開示する。が、女は二重否定的に展開せざるを得ない宮の心理を知らない。女は、時に発せられる宮の言葉の端々から、直に自身への疑念を感知しつつ、「…いかで、いとあやしきものに聞こしめしたるを、聞こしめしなほされにしかな」（一一一段）^① と思い悩むことになる。

ここまでの二人の〈停滞〉した状況は、十四段末尾で「あはれにはかなく、頼むべくもなきかやうのはかなしごとくに、世の中をなぐさめてあるも、うち思へばあさましう」と纏められる。一人称視点の叙述で通してきたのであれば、何の問題もないところであるが、「女」が客体化されていた事象を含めて、「かやうの」と包括的に捉えうるのは、〈叙述主体〉のみであろう。ならば「うち思へばあさましう」は、〈叙述主体〉の感懐なのであろうか。〈体験主体（女）〉の心情への回帰とも取れる叙述であるだけに、注意される部分である。これについては後述する。

（iii）一五段「石山詣で」・一六段「有明の月の手習文」・一七段「代作の依頼」

「はかなしごと」とは言え、和歌は、女の真情・本性を直に訴える有効な手だてであった。この三段では、女のと歌の力が停滞する事態を切り開くべく機能する様が、三様に描かれる。歌の行き交いを通じ、基本的に双方を見通す眼差しが採用される。

一五段は、「石山」という「出家」をも想起させる特殊な「場」に女を置き、一種緊迫した状況での詠歌を通じて、関係の〈停滞〉を打ち破るべく展開する。大倉比呂志が、女の「宮への愛の自己確認」の段と捉えつつ、宮の態度の変化にも触れるように、宮の女に対する疑念解消の契機となる段である。「山を出でて冥き途にぞたどりこし今ひとたびのあふことにより」の効果は大きい。〈叙述主体〉は、捨て身の女の表白に対する宮の反応に触れない。歌に尽くされたとして叙述の要を認めなかったものか。女との同化である。

また、十六段の「手習文」は、一人称の文体によって女の内心を直截に開示する、晩秋の有明の風情に寄せて展開された孤独な心境と、何よりも「同じ心」を求める哀切さは、誰に当たともなく書かれたという装いの下、それ故、女の本来の心を示すものとして、宮の疑念を晴らすに足る有効な手段であったであろう。しかし宮の五首重ねの返歌はこれに正対したとまでは言えず、女の期待は逸らされる。女の本性の「発見」は、消息文を媒体にするのではなく、「手枕の袖」の場面を待って、宮の目で直に為されることになる。

当初、「けり」を含む文体により物語的に設定された「九月二十日あまりばかりの有明の月」の場面であったが、「やがてひきむすびてたてまつる。御覧ずれば」として導入された「手習文」が、『宮わたりにや聞こえまし』と思ふに、たてまつりたれば、「（うち見給ひて）」と承接され、前後が整合しない。前

の記述を失念した結果ともされるが、消息文末尾の記述内容に引かれて、〈叙述主体〉が〈体験主体〉の現在時の心情に同調してしまった恰好である。両者の立ち位置の近接を示すものであるう。

一七段の「代作の依頼」では、女に対する宮の信頼の紛れもない証が示される。

【第二期】(iv) 一八段「手枕の袖」(女邸)

宮が女への疑念を最終的に晴らし、南院入りを切り出すのは、「十月十日ほど」の「手枕の袖」の段(一八段)においてである。不審を晴らしていく過程は、宮の眼差しが捉える対象の変化を通じて明確に象られている。¹⁴ これまで主として「消息」に向けられていた宮の視線は、「十月十日ほど」の夜の「手枕の袖」の場面を境に、「女」自身に直に向けられるようになる。宮が「御覧」になる対象は、明らかに転換する。

①…思ひ乱るる心地は、いとそぞろ寒きに、宮も御覧じて「人の便なげにのみ言ふを、あやしきわざかな、ここに、かくてあるよ」などおぼす。(一八段)

②よろづにもののみわりなくおぼえて、御いらへすべき心地もせねば、ものも聞こえて、ただ月影に涙の落つるをあはれと御覧じて…(一八段)

③…心からにや、それよりのち、心苦しとおぼされて、しばしばおはしまして、ありさまなど御覧じもて行くに、世に

なれたる人にはあらず、ただいとはかなげに見ゆるも、いと心苦しくおぼされて…「ただおはせかし。世の中の人も便なげに言ふなり…人のいと聞きにくく言ふに…(一九段)

右の引用部分は、あたかも先の「南院」での乳母の諫言に反駁するかのように、宮が自らの体験を通して「女」の〈本性〉を確認する場面である。宮は自身の眼で「御覧」じて、「女」を信頼に足るものと納得し、世人が下した「女」への評価を振り払う。繰り返される「人の便なげに言ふ」とは、乳母の言を指すのでもあろうか。「南院」の論理への反駁である。女の身持ちを巡る疑念の払拭が果たされ、「南院入り」が切り出されるのはその直後である。

ここでの叙述は、「女邸」を舞台とすることから、女が自らの体験を叙述し、一人称の叙述主体になる条件はあるのだが、〈宮が女を「御覧じ」て判断する〉という主題展開からして、女は被写体とならざるを得ず、叙述主体にはなり得ない。それ故、「見る」宮と「見られる」女を総体として捉える第三者視点が介在することになる。

例えば、①に続くのは、次のような被写体としての女の第三者的描写である。

④あはれにおぼされて、女、寝たるやうにて思ひ乱れて臥したるを、おしおどろかさせ給ひて…(一八段)

第一期に見られた△二つの場を移動する視点△とも異質な、「見

る」主体と「見られる」客体を同時に対象化する視点である。したがって、これに対する「よろづにもののみわりなくおぼえて、御いらへすべき心地もせねば」という女の感懷は、第三者視点からの叙述とも見なし得る余地が生じ、言わば物語的な様相を帯びることになる。

(v)一九段「宮邸入りの誘い」～二六段「疑はじなほ恨みじ」(女邸)

「南院入り」を切り出された「女」が、その決意を固めるまでの七段である。場は「女邸」。「南院入り」の課題が、宮の側から女に投げかけられてからは、それを受けて煩悶する女の姿が叙述される。主として二カ所(一九段)(二六段)に置かれる長文がそれで、「…と思ひ」のような形で、女の「心内語」として綴られるのが特徴である。

- ①…などのたまふにも、(げに、今更きやうに…いかがせん) など思ひて、「一宮の…北の方はおはすれど、ただ御方々にてのみこそ、よろづのことはただ御乳母のみこそすなれ…」と思ひて…と聞こゆれば…(一九)
- ②「かばかりねんごろに…さしもあらず」など思へば、「参りなん」と思ひ立つ。
- ③「心憂き身なれば、宿世にまかせてあらん」と思ふにも、「この宮仕へ本意にもあらず。巖の中にこそ住まほしけれ…なほかくてや過ぎなまし。近くて親はらからの御ありさま

も見聞こえ、また昔のやうにも見ゆる人の上をも見定めん」
と思ひ立ちにたれば、「あいなし…御覧じてん」と思ひて
…(二六)

④…たはぶれをせさせ給ふなめり」とは見れど、なほ苦しうで、「なほいと苦しうこそ。いかにもありて、御覧ぜさせまほしうこそ」と聞こえさせたれば…(二六)

①は、先の乳母の諫言を想起させるかのように、「南院」での宮の生活が伝聞の形で示され、②③では、宮への顧慮、決断の理由が示される。全て「女」の心内語によるため、一人称叙述の趣が強くなっている。また、④では、宮の疑念に対し「叙述主体」が地の文で「なほ苦しうて」と記した直後に、「なほいと苦しうこそ」と同語反復的に女の内心が宮に向けて吐露されており、「叙述主体」と「体験主体」は限りなく接近していることが判る。

以上のように、(iv)で被写体化された「女」が、(v)では、一人称的に内心を吐露することにより「叙述主体」とほぼ同化しており、叙述の位相は明らかに切り替わっているのである。

(vi)二七段「一昨日・昨日・今日」～三二段「冬の折々」(女邸)

夙に鈴木『全講』は、ここに至り散文叙述が減少し和歌が連ねられる傾向を取り上げ、「私家集的構成」「日記の形成意欲の衰弱」を指摘した。また、宮の出家を巡る発言の唐突さなどが、記事の「据わりの悪さ」として問題とされた。これを受けて、

例えば守屋省吾は、「絶望の深淵がいかなるものであるかを感じ得している」者同士の相互理解と共感の過程を描く『日記』は、「春つかたと思ふ」(二九段)という女の意思表示で終結しているとして、それ以降の展開を、「主題の喪失」、「方法の破綻」と捉え、「他者」による「宮邸入り完遂が全き姿であるというさかしら」と論評している。

確かに、「共感形成」の主題的展開は、女の合意を得て既に終結したかに見えるし、散文叙述の稀薄さ、据わりの悪さが目につくのも事実である。『全講』が二人の「忍びの恋」を『日記』の主題と捉え、守屋が、女の対「世の中」観に視られる「絶望の深淵」を前提に、それを知る者同士の共感を主題と見るように、『日記』の主題を「共感形成」に限定した時には、このような見解が招来されても無理はないであろう。

しかし、述べてきたように、この『日記』は「忍びの恋」「共感形成」のみを描くものではない。女の「南院入り」というもう一つの肝要な主題が、二人の間の現実的な課題として展開しており、それは決して「象徴的意味合い」に留まるものではない。また、この時点までに、宮との相互理解の深まりの中でお残る女の虚無感・出家への思いは述べられても、宮の側の「絶望の深淵」は未だ描かれていない。僅かに「…行ひなどするにだに、ただひとりあれば、同じ心に物語聞こえてあらば、なぐさむことやある、と思ふなり」(二九段)と女を誘うことばの端々に、宮の孤絶と信仰心が垣間見える程度であった。

言われるような全衰弱は、「南院入り」が現実化したこの期に於いて、更に根本的な心の合一を求めるべく実存の問題が宮から提示された、そのことに帰因するのではなからうか。

「年も残りなければ、春つ方と思ふ」(二九段)に続き、確かに遡及するかのように辿られる「十一月ついたちごろ…」(三〇段)以降では、女に「心細き」を感じさせる宮の側の不安が描かれる。

①「かしこに率てたてまつりてのち、まろがほかにも行き、法師にもなりなどして…」と心細くのためふに、「いかにおぼしなりぬるにかあらん、またさやうのことも出で来ぬべきにや」と思ふに…御覧じて、

なほざりのあらましごとによもすがら…(三二)

② ほどしらぬ命ばかりそさだめなき契りてかはす住吉の松あが君や、あらましごと、更に更に聞こえじ…(三一)

③ このごろは、御経ならはせ給ひければ、あふみちは神のいさめにさはらねど法のむしろにをれば立たぬぞ(三二)

④ いかにおぼさるるにかあらん、心細きことをのたまはせて、「なほ世の中にありはつまじきにや」とあれば、

呉竹の世々のふると思ほゆる昔語りはわれのみやせんと聞こえたれば、

呉竹の憂き節しげき世の中にあらじと思ふしばしばかりも

などのたまはせて。(三三)

①は、女を召し入れた後の生活に関わる宮の不安を示す。宮の内心には出家のことが去来している。②は、女の端書「しかばかり契りしものをさだめなきさは世のつねに思ひなせとや」への宮の返歌。「世の定めなき」を引きあい、宮の意思を確認しようとした女に対し、宮は「住吉の松」に契りの永遠性を込めながらも、同時に「命の定めなき」を詠わずにはいない。繰り返される「あらましごと」という弁明からは、逆に向後への宮の不安が色濃く浮上する。宮に将来を預けるべく決断した女と、それを担いきれるか不安に圧される宮との間に、微妙な齟齬が生じている。③は、仏道帰依に傾斜しがちな宮の昨今を示す。「南院入り」直前の④では、自らの死への漠たる予感が、改めて宮から発せられる。問い返すかに詠われた女の一首に対する宮の返歌は、歌語「呉竹」に寄せながら、厭世観が極まったかのように「あらじとぞ思ふ」と幾分か説明的に詠い為される。「あらましごと」と同様の弁明であろう。

このような宮の不安は、①では「いかにおぼしなりぬるにかあらん」と、女には理解しがたいものとして受け止められた。この心内語とほぼ同様の言辞「いかにおぼさるるにかあらん」が、④の地の文に現れる。〈叙述主体〉もまた、ここでは宮の内面に立ち入って説明しようとはしない。心細さを感じている点でも、「女」と〈叙述主体〉は相通じ、直接話法と間接話法の違いにすぎないようにさえ見える。

宮の内心は、「女」に寄り添いがちの〈叙述主体〉からは、述べてにくかったのであろうか。そうではあるまい。敢えて立ち入らなかったのである。以下の叙述に従えば、宮はこの不安を振り切るかのように、突然「宮邸入り」を執行する。二人の間に潜在する実存に関わる未決の難問は、女には漠たる不安、心細さとして感受されたまま先送りされる。「予兆」的とも評されるように、史実では数年後に宮の不安は的中し、その死が現実のものになる。

見てきたように、宮の側の「絶望の深淵」は、「南院入り」が現実化したこの時期に至って初めて洩らされたのであり、その記述が散文として成熟していないとされるのは、このような漠たる不安を宮は積極的に説明しようとせず、女もそれを追尋しなかったことに因らう。〈叙述主体〉もまた、宮の不安に立ち入り説明することはしなかったのである。

歳時記的な和歌の間に散発的に置かれながらも、二人の間に潜在する実存的な不安の問題は、「南院入り」目前のこの時期においてこそ、このような形で叙述されなければならなかったのではなからうか。

【第三期】(vii)三三段「宮邸入り」→三五段「北の方の退去」

(南院)

「十二月十八日」の女の南院入りは、

「例は…もし、やがてとおぼすにや」と思ひて、…「さ

ればよ」と思ひて、「何かは…なかなか人も思へかし」など思ひて…櫛の箱など取りにやる（三三段）

と、第二期（Ⅴ）と同様の、女の側からする一人称的叙述で記される。

「南院入り」以降、舞台は南院に一元化される。これまで「共感」を求め二人の「距離」を縮めるべく交わされた贈答歌は、「共感」の主題が不要になった今、その役目を終え姿を消し、散文のみの叙述が最後まで続く。「場」の一元化により、俯瞰の構図は基本的に必要性が薄れ、〈体験主体〉による一人称叙述の条件が整うはずである。これまで伝聞の形、あるいは〈叙述主体〉を通じて開示されてきた「南院」内部の複雑な事情は、女が直截に「見聞した」体験的事実として述べ得る状況に立ち至った。確かに「南院」に入ってから初めて、女は此处に参集する人々の実態に直面することになった。宮邸での晴儀に目を見張る部分（三四段）などは、一人称主体としての女の叙述とも見なし得る。

が、この期の大半は、宮と北の方の諍いに関する記事で占められ、その叙述は、女自身が「見て語る」形を取らず、〈叙述主体〉に任される。『全講』は、これを「超越的視点の拡大」と捉え、「登場人物の増大による『物語』的叙述への切り換え」と見る。「登場人物の増大」は、主題的観点から言えば、女と宮の関係が、「南院」の複雑な人間関係、就中、北の方及びその姉の春宮女御との軋轢の中で、第三者的に注視されることになったことを意味し、〈叙述主体〉は、その範囲内で人々の赤裸々

な実相を見、会話をつぶさに聞き取ることになる。

最終段「北の方の退去」（三五段）は、ほぼ完全な三人称叙述を見せる。「北の方の御姉、春宮の女御にてさぶらひ給ふ、里にものし給ふほどにて、御文あり」と、唐突に「南院」の外ににいる北の方の姉女御が紹介される。姉妹間で交わされた消息文は、女の「南院入り」に伴い北の方が受けた言わば私的な屈辱が、その姉を通じて「春宮」周辺の政治力学に波及していく可能性を示すものであった。まさに「南院」の時空の特殊な論理が機能し出すのである。

この消息文の内容は、本来「女」の知り得べくもないもので、一人称的叙述は不可能である。さらに、侍女たちの言動を通じて女と宮の行動が批判の対象となり、これに対する北の方の内心が明らかにされるが、これもまた、女の一人称叙述にはなじまない。三人称的叙述の機能が要請される由縁である。『日記』は、「宮、入らせ給へば、さりげなくておはす。…ものものたまはず」と、第三者的記述で終結する。「女」には、手出しのしようもない事態の展開なのであった。

こうまでして三人称的叙述が採られた理由の一つには、「女」と対峙する妃側の事情を客観的な形で詳らかにしなければ、南院における「女」の立ち位置が鮮明にならなかったことがある。「女」の立ち入りようなない事情を描く必要があったのである。

加えて、北の方の姉「春宮の女御」の介在により、皇位継承

に関わる「宮」の立場への波及が、外から描かれる必要があったと考えられる。「南院」は、当初からそのような皇権を巡る時空としてあった。その複雑な人物関係の渦の中に在りながら、「女」は「宮」の叙述の背後に庇護される形で、外在化され点景化される。

とは言え、第三期の記述が終始三人称的叙述に徹していたわけではなく、末尾に近く、「……と聞こえさわぐを見るにも、いとはしう苦しけれど……ただ聞き居たり。聞きにくきころ、『しばしまかり出でなばや』と思へど、それもうたてあるべければ、ただにさぶらふも、なほもの思ひ絶ゆまじき身かなと思ふ。」¹⁰と、思い出したかのように「女」の弁解的な述懐を挟み込まずにはいない。

三、『日記』の〈叙述主体〉

以上、曆日的時間記述を軸に便宜三期を区切り、七つの小場面に即して叙述のあり方を見てきた。「南院入り」の主題を担う各場面は、それぞれその場面構成に適う叙述の形を見せていた。

指定した〈叙述主体〉は、女の関与し得ない「南院」での場面に限らず、女への疑念を抱く宮の側の心理・状況を記す場合、あるいは宮と女を包括的に客体化する場面（「手枕の袖」の場面、南院入り後の場面など）において顕著に機能するが、宮の抱く

実存的不安には立ち入らない。宮に対する一貫した敬語の使用にも見られるような距離を置く。

一方、「女」と〈叙述主体〉は屢々ほぼ同一の感懐を示し、限りなく近接する。

一期 ii の項で触れた一四段「あはれにはかなく、頼むべくもなきかやうのはかなしごとくに、世の中をなぐさめてあるも、うち思へばあさましう」と同様の包括的な叙述（地の文ともされる）は、他に二期 vi の三二段末尾「……など言ふほどに、例の、つれづれなぐさめて過ぐすぞいとはかなきや」、三期 vii の三五段末尾（前掲）などにも見られ、当『日記』の基調を示すものと考えられるが、「女」自身の感懐の吐露とも、「女」の有り様に対する〈叙述主体〉の主観を交えた「評」とも取れなくはない。「女は」という主語の省略形である可能性は残る。

このような中で、一期 ii の「うち思へばあさましう」は、語法からして主語「女は」の省略形ではあり得ず、「女」の一人称表現か、さもなければ〈叙述主体〉の感懐と見るしかない。

〈叙述主体〉が、「思ふ」主体として実的に迫り出してきたとすれば、これはもはや「語り手」としての発話ということになる。が、土方の言うように、「地の文が語りの文体ではない」、「語り手主体・〈語り場の場〉の設定が十分に形成されていない」、「語りの場」と〈物語の世界〉との距離感が希薄である」という全体的傾向からして、この部分だけを根拠に「語り手」を想定することは難しく、やはり、『日記』の基本的な立脚点は「女」

の一人称的叙述にあると見るべきであろう。

確かに宮との「共感形成」のみを主題として主情的に描くのであれば、一人称叙述で足りたかもしれない。が、「南院入り」という主題の展開には、二元的な時空の設定と、宮と女それぞれの思いの交錯を対象化する眼差しが不可欠であった。「叙述主体」は、「女」が一人称主体として関わり得ない範囲で、言わば代替的に働く。この限定的ながら一種自在な叙述の機能が、〈叙述の混乱〉と見なされたのであろう。あるいは、場面自体が一貫した叙述視点という制約に捕らわれることなく構成された、と言うべきであろうか。

主情を抱えた自己と、社会関係に規制されながら形作られていく自己の双方を、「語り手」に委ねることなく記そうとしたところに、この特異な叙述は生まれたように思う。

四、「跋文」に見る叙述意識

最後に、「跋文」の体で記された「宮の上御文書き、女御殿の御ことば、さしもあらじ、書きなしなめりと、本に」^①を取り上げ、異なる角度から右の論の裏付けを試みたい。

この「跋文」は、通常「書写者の立場での評言。『と本に』は更にその本を忠実に書写した意の注記。いずれも後代の書写者による二次的、三次的添え書きという体裁で書かれているが、実際は、作者自身の手になる、『日記』に虚構的含みを持たせ

る臆化表現と見る説が有力」^②とされるものである。

〈書写者〉の設定が、右に言うように「作者自身の手になる」仮構であるとすれば、これは「書写者の立場での評言」を装った、作者による読み手に向けた〈読み〉の指示であると理解される。とすれば、間接的ながら、この付言を通じて、『日記』の叙述に対する作者自身の見解を覗うことができるのではなかろうか。

〈最初の書写者〉は、テキスト内容を直に作者と結び付け、作者による一部「書き為し」を想定するが、テキスト内に「語り手」、あるいは「語り手」による「語り為し」を想定してはいない。また、作者と「女」の関係にも言及しない。つまり、〈最初の書写者〉は、テキストを作者の自記と認識しており、第三者的な〈語り〉の構造を認めていないものとみられる。とすれば、この〈最初の書写者〉を設定した作者自身もまた、当『日記』を、作者の自記として読まれるべく構想していたことになる。

改めて確認したいのは、この「跋文」が、〈書写者〉の評言を装いながら、『日記』全体ではなく、直接には「宮の上御文書き、女御殿の御ことば」を取り立てて問題としていることである。「さしもあらじ、書きなしなめり」という〈最初の書写者の付言〉は、文字通り「宮の上御文書き」「女御殿の御ことば」に限定してその信憑性を疑うのか、あるいはこれらに代表させて「北の方退去」事件の全体に仮構の手が加わったことを意味するのか、必ずしも判然としない。が、いずれにしても、〈書写者〉の

設定を通じて、「南院入り」後の叙述部分に何らかの「書き為し」があったとして、その実録性に若干の疑義を挟む形を取ることにより、作者自らが、自記を基調とする中に一部作為を混じえたこと、その虚構性に言及したことになる。

逆に、それ以外の部分¹⁹⁾を問題としないのは、それが作為とは無縁の自記たることを自明の前提としていたためと考えられよう。少なくとも、「女」の体験外の事象を記す部分、「女」という第三者視点を抱え込んでいる部分を含めて、作者はこれを自記と認識して執筆し、叙述の「混乱」を殊更に意識することはなかったのではなからうか。跋文から導かれるこのような推定は、これまでの考察と矛盾しないし、むしろ補強的に働くであろう。

因みに、跋文が取り立てて「宮の上」と「女御殿」のことに拘ったのは、『日記』執筆時現在の状況が絡んでいるからではなからうか。

帥宮挽歌群・五十首歌を踏まえつつ、追懷の思いを揺曳しながら南院入りまでが描かれ、引き続き南院譚が執筆されたと見るならば、その時期は、早くとも帥宮一周忌後の翌春(寛弘六年四月以前)かとされる一条天皇妃彰子のもとへの出仕の頃以降となろう。この時点で、読者(例えば森田兼吉は、「和泉周辺の人たち、たとえば中宮彰子の女房とか、帥宮の使っていた硯を式部に乞うたり…宮の機を乞うたりしたような帥宮に仕えていた人など」を想定する)が、亡き帥宮のすべてを過去のこと

として了解するとしても、存命の「女御殿」すなわち現東宮居貞親王妃城子(天禄三972年〜万寿二1025年三月)、および確認資料を欠くものの存命中と思しい帥宮妃「宮の上」の、まさに「人笑へ」を招きかねない言辞を、すべて過去の事として読者に了解せしめるには、未だこの記事は生々しすぎるという作者の判断があったのではなからうか。

「南院」は未だ過去になり切れていないのである。宮という個を失ってもその存否などとは無関係に、「南院の論理」は執筆時現在の作者の周辺に機能し続けている。跋文は、文芸的な意匠と言うよりは、執筆時現在における「南院」とその周辺を慮って、叙述のリアリティを緩和するために置かれたものと捉えておきたい。

このような執筆時現在の状況が、〈女〉に近接しながらもそれとは別個の〈叙述主体〉の設定をもたらした遠因なのかもしれない。

注

(1) 今井卓爾『平安朝日記の研究』(啓文社 一九三五)、
『平安時代日記文学の研究』(明治書院 一九五七)

(2) 鈴木一雄・円地文子『全講和泉式部日記』(至文堂
一九六四、改訂版一九九四)

(3) 山口仲美『和泉式部日記』作者の意図―「物語」をめざして―『平安朝の言葉と文体』風間書房 一九

九八

- (4) 土方洋一『和泉式部日記』の表現構造」(『青山学院大学文学部紀要』46号 二〇〇五・一)→『日記の声域―平安朝の一人称言説―』(右文書院 二〇〇七)
- (5) 秋澤互『和泉式部日記』の視線―超越的視点の再吟味を通して」(『活水日文』四五 二〇〇四・一)。秋澤は、この視点が単なる想像の産物ではなく、「情報源の素材提供者」から提供された複数の素材が、加工、作品化により一元化されたもので、その結果、架空の視点である「叙述の視点」が招来されたとする。『実在』としての複数の『視角』を通して得られた記事内容が、作品化に際しては、『方法』としての『視覚』から見た風景に統合されて語りなおされる、といったメカニズム」を構想する。「実体的な分析には馴染まない」としつつ、『実在』としての複数の『視角』を通して得られた記事内容」を「作品化」の前提とするのは、虚構の「物語」との差異を意識するからであろう。
- (6) 夙に織田裕子『和泉式部日記』の作者について」(『国語国文』一九五八・四)が、本稿と同様に三期に分け叙述方法を探るが、共感形成を主軸と見る点で私見とは主題の把握を異にする。
- (7) 拙稿「南院の時空―『和泉式部日記』の構造試論―」(『中古文学』91 二〇一三・五)。暦日的時間の下、固有の官職名で人物が示される「南院」に対し、「女邸」は季節に即した歳時記的・和歌的時間が流れる私的な空間としてある。
- (8) 日本古典文学全集『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』藤岡忠美解説(小学館 一九七一)、宮崎莊平「和泉式部日記の場面とその構成」(『平安女流日記文学の研究』笠間書院 一九七二)などが、恋愛の進展過程から、同様の三期を区切る。
- (9) 先に稿者は『和泉式部日記』の構成試論」(『国文学研究』七十九集 一九八三・三)において、〈和歌的論理〉の有り様から『日記』の構成について論じたが、今回の三区分は、一五段「石山詣で」以下の三段(二期(並)とした部分)の扱いが異なるものの、基本的にそれと矛盾するものではない。
- (10) 『日記』に潜在する追懐的要素については、拙稿「追懐の方法―『和泉式部日記』の場合―」(『王朝女流日記を考える―追憶の風景』武蔵野書院 二〇一一)参照。「女邸」とは異なり、「南院」が追懐性と無縁であることは、注(7)拙稿で述べた。
- (11) 古田正幸「〈召人〉と『和泉式部日記』の女の差異」(『日本文学』六一(5) 二〇一二・五)
- (12) 平田喜信「和泉式部日記の成立―もの思ふ女の記」(『王朝女流日記を学ぶ人のために』世界思想社 一九九六)

- (13) 大倉比呂志「石山詣での記事の特質―小舎人童の存在―」『平安文学研究』五四輯 一九七五・一一) ↓『平安時代日記文学の特質と表現』(新典社 二〇〇三)
- (14) 高野祥子『和泉式部日記』における女と宮の視点―「手枕の袖」の場面を中心として―(『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』9号 二〇〇八)、注(5) 秋澤論文。
- (15) 守屋省吾「和泉式部日記私考」『論集和泉式部』笠間書院 一九八八)
- (16) 注(4)に同じ
- (17) 三条西家本、応永本、寛元本ともに、同種の跋文を持つ。
- (18) 近藤みゆき訳注『和泉式部日記』補注71(角川ソフィア文庫 二〇〇三)
- (19) 三田村雅子『紫式部日記和泉式部日記』日本の文学古典編17 ほるぷ出版 一九八七)は、これを宮邸入り以前の部分が、「事実だということ」の「宣言」と取る。他に跋文を扱うものに、「昔語り」に関連づける金井利浩『和泉式部日記』はいかに擱筆されたか(『解釈』四十九巻―十一・十二号 二〇〇三・一二)など。
- (20) 森田兼吉『日記文学論叢』(笠間書院 二〇〇六)

くばき としこ (日本文学)

白梅学園大学子ども学部発達臨床学科
Toshiko Kuboki: A Study on the Method of Description in Izumishikibu-nikki